

# 葉っぱの力(4)

群馬 直美

## 地球指圧師

富士山クリーン活動の清掃体験に参加した。

集まったメンバーは、小学生、女子中高生、初老のご夫婦、若いカップル、働き盛りのお父さん、お母さん、OL風の女性、大学生らしき若者などなど。家族で、仲間連れで、もちろん個人での参加もあり、さまざま。総

勢六十人くらい。

「どんなちいさなゴミも、拾ってください。では、目的地まで徒歩で移動しまーす」

ナビゲーター役のひとの先導で、みんなでぞろぞろ移動する。これから青木が原に面した道路沿いを歩き、ゴミを拾う。各自用意してきたゴミ袋を手に手に、やる気

満々だ。

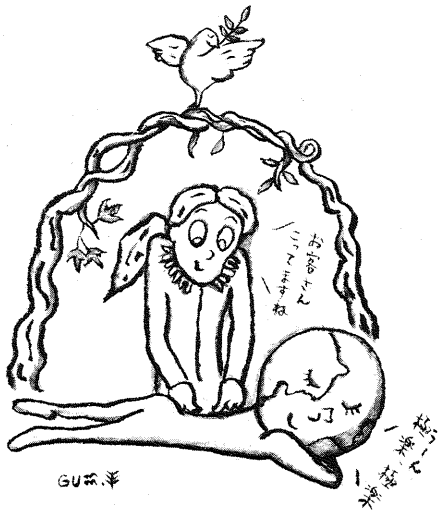
普段、葉っぱや木の実を探し歩くことはあっても、ゴミを探しながら歩くのは初めて……どんなちいさなゴミも拾う……心の中で呪文のように繰り返していると、一分もしないうちに、あつた。土に埋もれくしゃくしゃになったシユガーレスガムの包み紙。うれしい。大きなゴミ袋の中に入れる。

スチール製のつぶれたジュースの空き缶が、道端脇の草むらに。分け入って拾い上げると、見たこともないデザイン。土と雨水が入りこんでいて重い。相当な年月をここで過ごしてきたのだろう。なにかひと時代分の歴史を拾い上げたような、壮大な気持ちになる。たのしい。

今度は、ブルーグレーの古ぼけたプラスチックの破片。よく見ると波打っている。農家の鶏小屋の屋根だったのかな？ 一羽の鶏を雨風から守りぬいた一生だった……などと思いをはせる。おもしろい。ゴミ拾いは、た

のしい。

砂利道に無数に散らばっている五ミリメートル角の破片を、しゃがみこんでひとつひとつ拾う。丁寧に拾っていると、なんだか地球を指圧している気分。指圧の心は母心、押せば命の泉湧く……疲れきった地球に、「お疲れさま。ご苦労さま。ありがとう」



## 野性のゴミ・ニケーション

みんなどんどん目的地に向かって突き進んでいる。

目的地の手前で、プラスチック拾いにはまってしまったわたしは、おいてけぼり。遠のくうしろ姿に少し不安になりながらも拾っていると、年配の女性がひとり黙々とプラスチック拾いに精を出していた。よかった。

山歩きをするひとがよく被っているエンジ色の帽子、軽快な薄手のヤッケ姿。山好きなひとなのだろう。戦友をみつけたような安心感で、破片を拾いながら近寄り、「こんなにあるとは、はまっちゃいますよね」

とにこやかに声をかける。無言。脇目もくれず、ひたすら拾い続けている。コワイ。わたしの声が、届かない……。

青木が原の樹海に臨む自動車道を数珠なりで歩く。

草木が生い茂り、一見ゴミなんか無い。



目につくのは、豊かな自然の恵み。色づきはじめて草木の葉。きのこ。ミズナラの大きなどんぐりやイガをまとった栗の実が惜しげもなく落ちている。ガズミの実も紅く熟し、きれい。

ほしいものはいつもなかなかみつからない。今日は、ゴミがみつからない。

それでもゴミはあるもので、目ざといひとは空き缶やペットボトルやビニール袋、発泡スチロールの破片を緑の海からすくい上げる。

柵を乗り越え緑の海に飛び込み、色とりどりの空き瓶や古タイヤを、みつけたでしてくるひともいる。みごとだ。

わたしは、列のうしろのほうからついて行く。

六十人、百二十の瞳で見つめれば、見えないものも見えてくる。先人たちが通り過ぎた草むらから、コーヒーの空き缶。まだ新しい。ついさつき捨てたばかりのよう  
にきれい。逆さにするとコーヒーのしずく。うれしい。  
わたしにもみつけられた。いつの時にも、必ずやり残されたことがあるものなのだ。わたしはそれを見つけてやればいい。とコーヒーの空き缶みつけて思う。

ひとつみつけるとつぎつぎみつかる。キャンディーの包み紙。お菓子の空き箱。ムササビの屍。煙草のフィルター。かなり、たくさん。巻紙や葉っぱは土に返って

も、フィルターは永遠に残るのか。勉強になる。

一時間半歩き、折り返し地点に到着。今度は歩道のあの側を歩いて戻る。

色づいた木の葉がたくさん落ちていた。見たこともない葉っぱに、思わず手が出る。今日はゴミ拾い……なのに、やっぱりのどから手が出る。

何枚も拾い、ゴミ袋と葉っぱで両手がふさがる。ふつと横を見ると、小高くなった歩道の下に広がる草むら遠くに、発泡スチロールの白い箱が捨ててある。振り返ると、精力的に緑の海に飛び込んで、ゴミをすくい上げていた青年ふたり組。

「あそこに発泡スチロールの箱がありまーす」

近づいたふたり組をよくよく見てみれば、ひとりは何配のひとだった。

ちよつと躊躇したあと、若いほうが歩道の柵を乗り越え、コンクリートの壁をつたわり草むらに降り立ち、泳

ぐよなみごときで発泡スチロールの箱のどこまで行って、ほかにゴミがあったのか拾い集めている。

「ひとつあるといくつも捨ててあるものなんですね」

年配のひとに話しかける。無言。緑の海でゴミ拾う棒を、じっと見つめている。わたしの声が宙に舞う

……。いたたまれなくなって立ち去ろうとしたけれど、ザックザックと戻ってくる青年を待った。

「うわー、ありがとうございます。凄いです！ ファイト一発、○○○○Dみたいですよ」

と拍手しながら迎えると、満面の笑顔で青年は応えてくれた。この日はじめてのリアクションにほっとした。

たまに山歩きすると、すれちがう見知らぬもの同士が決まって「こんにちは」とか「あともうちょっとですよ」とか「がんばれ」と声をかけあっていた。

ゴミ拾い歩きは、狩猟と似ている。人間が野性に返るといふか……。野性に返った人間は、喋らない。全身眼にして獲物を狙う。全神経を獲物に注ぐ。すべては獲物

のためにある。

わたしはこの日、野性に返れなかった。

### 街角ゴミ・ニケーション

ゴミの入った袋を囲み、ナビゲーター役のひとが語る。

「今日のゴミは多いと思いましたか？ 少ないと思いましたが？（ぐるりみんなを見渡して）どうやら、少ないと思ったようです。しかし、この道は一年前にも隈なくゴミ拾いしたのでした。ところが、またこんなにもゴミが出た。わたしたちは驚いています。」

富士山麓のゴミ拾いと聞いて、青木が原樹海の奥まで行かれると思ったかたも多いかもしれません。ですが、ゴミが捨てられるのは自然界と人間界のハザマなんです。みなさんががたがた歩いてきたところです。最初に、どんなちいさなものも拾ってください、といいましたが、たとえばこのビニール……（くしゃやくしゃ

になったちいさな透明ビニールの切れ端を手に持ち）  
これが危ない。

鳥は光るものに敏感なので、巣作りのとき小枝と一緒にビニールも集めてしまう。すると巣の中でビニールはたてに裂け、雛の足に絡まりつく。巣立ちのとき、絡まったビニールが取れず、片足のない鳥が最近急増しているのです。

プラスチックのフォーク、これも危ない。山で捨てられたフォークは川から海に流れ出し、それを呑み込んだ魚は消化できず命を落とす。死んだ魚のからだは藻屑と化しますが、プラスチックのフォークはそのままであり続ける。それをまた別の魚が呑み……という死の連鎖を永遠に繰り返す。

プラスチックのフォークはフィッシュ・キラーとして、今も海で彷徨い続けているのです」

ひとつのプラスチックのフォークを生み出すためのプ

ロセスは並大抵のことじゃない。安全性、利便性、生産性、コスト面などさまざまな角度から検証して、すべてをクリアにした上でデザインされ、ようやく世に出てきた。それが大海原で「海の殺し屋」と化しているとは。ひと昔前、わたしたちは平気でゴミを捨てていた。でもその当時捨てられていたのは、きちんと土に返るゴミだった。ゴミであつたけれどゴミではなかった。

ゴミという概念がここ十数年でがらりと変わった。藻屑と化さない、自然界に戻らないもの。それが現代のゴミ。

自然界は、いつでもどんなときでも、身を挺してわたしたち人間に語りかけている。

鳥は片足を捧げ、魚は命を捧げ。

「ですから一番危険なのは、ちいさくて土に返らないゴミなのです」

プラスチックのフォークに欠けていたのはエコ・デザ

イン、土に返るかどうかの検証だったのか。

百年後のことを考えて、ものづくりにも挑む姿勢は、志の高い生き方につながる。では、わたしも……百年先のことを考えて「気づいたときに即ゴミを拾う」ことにした。山でのゴミ拾いは、たのしかった。

百年後の地球に思いをはせ、ちいさなゴミをひょいとすくい上げる身軽さはカッコイイ。ゴミのたのしいコミュニケーションを図れる精神性は、

心を豊かにしてくれる。

街に出た。……対応しきれないゴミの数。気づかなかった。わたしの街は、ゴミの街。わたしひとりが拾ったところで、なにになるものでもない。気づいたら、「拾う」ことが出来ない。気づいたら、「見て見ぬふり」して歩く。

足のない鳥の群れ。プラスチックのフォークの波……百年後の地球の姿といっしょに歩く。



そして街角には、ゴミ。

ちよつと身をかがめ手を伸ばしてみた。すぐに拾えた。簡単なことだった。なんだ、手をさしただせばよかつたんだ。ひとつ拾うたびに、足を得た鳥が、青空に羽ばたく。百年後の地球が、楽園に変わってゆく。

(葉画家)

☆この連載は今回で終わります。